
義妹は姫君剣者ッ！

初音カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹は姫君剣者ッ！

【Zコード】

Z2507X

【作者名】

初音カノン

【あらすじ】

義妹は清楚で可愛い超美少女ッ！…無差別に皆を虜にする彼女、神岡琴音、は異世界の剣士だった…。

俺が東京の町をブラブラしてた時に偶然にも義妹を見かけてしまつたせいで俺までもが巻き込まれてしまつー。

主人公は気が付くと魔法少女に変身していくッ（少女って所に注目！）

少女だからな？俺男だし。無理矢理…

：俺が魔法少女に転生した時の姿は、妹以上に可愛いらしい…

魔法少女（正体ロリコンスケベ）と剣士（美少女義妹）のお話。
話も設定も適当です。勝手に小説名変えました。スミマセン…、

First 天使が舞い降りる

ムサ^{ムサ}い男子校から帰宅する俺は家に帰るのを急行していた。やつと
癒^{オアシス}される！一日のムサ暑苦しい臭いを全て忘れさせてくれる所謂俺
の天^{エンジェル}国で天使が待機している家へ。俺の脳内はそれだけだった。

「只今。」

可能な限り冷静に呼び掛け、そして天使を待機するのだ。

「お帰^{エンジョル}りい～！」

口リ系な服の天使は俺の前に姿を現した。彼女の名は、神岡琴音（^{エンジョル}14歳）中学生。序に童顔なので小学生にも見えるその姿。そして俺の妹ながら妹は良く出来た美少女だと思^{エンジ}う。褐色な髪の毛に雪のような肌。

琴音の細い腕が前に出て、俺は鞄を預ける。

「隼くん、今日はオムライスだつてえ～！」

無邪氣過ぎる笑顔が俺に向けられる。毎度この瞬間はキュン死に直然だ。誰が見ても俺と妹の血が繋がつてないのは見当がつくだろう。

「……そうだ。はいコレ。琴音欲しがつてたろ？」

琴音が欲しがつていたブレスレット。今学校で大流行してるとか言つてたから買ったのだが。・・・少し甘やかし過ぎか？

「隼くん！大好きい！」

そう言つて見せる笑顔に俺は相当弱いと思う。甘やかしすぎだとうのは承知の上なのだ。しかし笑顔を見ると如何しても止められないのが現状だ。

翌朝、学校にて

「隼人、今日渋谷行かなねえ？」

友達の広大からの誘いだつた。．．．確かに琴音は出かけるつて言つてたつけ。家に天使が居ないのであらば、俺が帰る必要性も無いのだ。

「今日はフリーだし大丈夫かな」

「つて！お前は何時もフリーじゃねえのか？」

「．．．そーだな。」

俺は妹と比べ（血が繋がつていなかから当当たり前だが）凡人だ。コレといつた特技も無ければ勉強も普通。因みに俺の辞書にモテ期と言つ言葉は無い。

広大は何だかんだ言つてモテる。チヨコを翌年も10個近く貰つていた。．．．いやそれ以上かもな。持てる癖に俺と何か連んでるから、つくづく持つた得ないヤツだと思う。

。 。 。

「別行動で。何かあつたらメールなー。」

「ああ」

着いてからそのまま広大と別れ、適当にブラブラしていた。ソレだつたら一緒に行く意味が無いと言うツッコミをどうかこらえて欲しい。俺は男ながら東京の街をブラブラするのが結構好きだ。ただ時間が過ぎるだけなのに一瞬一瞬が不思議と体に刻まれる。コレは妹以外の唯一の『癒し』だった。

急に喉が渴いたから建物の間にある、つい最近見つけた自販機へ向かう。人通りが少ない所。

そこで予想もしなかつた人物に出会う事となつた。

・ ・ ・ あの後姿、琴音か？

琴音らしき人が建物と建物の間で縮こまつっていた。

・ ・ ・ 何やつてるんだ？

お尻を地面に付けない体育座り状態。短すぎるスカートからは、太ももがちらつかせていた。

・ ・ 少しは用心しろよな。

お前みたいな美少女は東京で何があるか分からねえのにな。妹は下を向いて何かをブツブツ言つている。

「おい ・ ・ ・ 「

．．．琴音。そう言い掛けた時だった。

「グオオオオオオ　．．．．．」

竜巻の様な風が一瞬にして起り、俺の体は宙に舞つた　．．．はずだ。

そこからこの記憶が無い俺には断言する事が出来ない。

First 天使が舞い降りる（後書き）

俺はどうなるんだ！？

気が付いた、のだが……どうなっているのだ？俺の体が目の前にあつた。つ、つまり魂と体が離脱した？

「……わけねえか。」

一人でそつ喰く事しか今の俺には出来なかつた。そつ、ここは真っ白な部屋。寧ろ透明と言つても過言では無いだらう。『俺は何故此所にいるのか』そんな疑問を残しつつ記憶をたどる。然し覚えていたのは、妹を見て風が起つた、所で消えていた。

さて……俺はどうすれば良いのか。部屋を見渡すがハツキリ言つて何も無い。……いや、空氣はあるよ？そんなツツツミミした低レベルなヤツはまつておこーかな？

気が付くと何故か金属で古い、大きな扉があつた。わー不思議。じやねーよー…さつきまで本当になかつたんだよ？普通に怖いから。

コレは行けつて事だよな？そう思いながら扉を開けた。

「グギギギギギー」

怪しげな音がして扉が開く。俺は何処に居るんだ？

扉の中は霧がかかり中々見えない。周りの霧が薄つすり消えて何処に居るのか、からつじて分かつた。

……森？

扉の向こう。それは森だった。寧ろジャングルだな。そう言えば俺ここで一度も人影見てないのだが、大丈夫なのだろうか結構余裕そうかもしかんが、俺の足、バツチリ震えているぜッ…。

「ガサガサ……」

(ビクツー！)

突然の物音にも超敏感な体。チクショーツ、立つちまつた。

何か嫌な予感がする―――

そして不運にもソレは当たってしまう事となる。虎の様な魔物が姿を現した。羽らしきモノが生えているのが気になるが、今はそんな事言つてる余裕は無い。恐らく……いや絶対この魔物は俺を狙つているだろ？ 口から口ダレ出でますよ？ 君。

「グオオオオ！」

「イツならパクツヒ一口だな、こりや。

「グラウド待ちなさい。」

そこに、声、が聞こえた。聞き慣れた天使の声だ。

「琴音？ … 何で？」

そこには何故か琴音がいた。しかも何時もは可愛い服で皆（俺）を虜にしているのだが、一段と誰もが惚れちまう様な姿。

second

異世界、そこがあり（後書き）

どんな姿だよ！

third 義妹の強しその姿

琴音の格好は俺のハートをわしづみモンだつた。上半身は水着の様。下は制服と同じ長さのスカート。ついでに腰には2本の剣も揃えていた。剣を構えていてこんなに可愛いのって凄げえな。

「隼くん 何故？」

俺を見つけた琴音は酷く動搖していた。しかし直ぐに魔物の存在に気付き意識を集中させていく。ノックオンしたら忽ち真剣な目付きになる。

「説明は後で聞く。隼くん下がつててね、とりあえずヤツチャうー！」

今までに見た事無い彼女の勇敢さに俺はビビッていた。妹は正直何時も天然なのかと思っていたからだ。魔物はターゲットを俺から琴音へと変えたようだ。

．．．琴音が剣を抜いた。そして剣から光りが射す。彼女はその光が集められる様に身に纏つた。

「しえるだあ！」

可愛らしい声と共に凄い音がして、妹はその音の共に動き出す。同時に魔物も妹に向かう。共に走つてすれ違う、一瞬の出来事。

両者触れていない。．．．と思ったのだが、魔物は倒れた。一体2秒の間に何があつたんだ…？俺には彼女達の動きが見えなかつた。

「え……？」

俺の目では到底何が発生したのか分からなかつた。

「見えない空間のエネルギー（波動）が宿つてゐるの、コノ剣には。」
「波動……とか何だか知らんが剣と魔物は当たつていない。匕首も
つて倒したんだ？」

「……でも魔物に触れていなかつただろ？」

「だからあら！ 剣先で切つてないの。剣の波動（剣の見えない波の
様なモノ）でやつたから触れていないの。

剣先の刃物で切るのは古い考え方だよ？」

「どういう事だ？ 剣の刃先では切つていい……。波動で？」

「魔法……」

「そうそうー魔力に近い力モ。」

呟いただけなのに琴音は聞き逃さなかつたようだ。

要するにこう言つ事らしい。刃先では切つてないらしく、波動で倒
したらしい。そして波動は魔法の一部だそうだ。

結構すんなり受け止めちゃつているが、俺はスッカリ重要な点を忘れていた。琴音のせいで口に来たのは間違い無いだろう。

「琴音、俺は何故此所にいるんだ？」

「うへへん。教えて欲しかつたらあ、どうじよつかなあ～？」

来た・・・琴音小悪魔モード！天然一筋のはずな琴音が急に小悪魔系女子に変わる、そのギャップで惚れさせる事の出来ない男子など居ないだろう。それくらい超絶可愛いのさッ！

third 義妹の強しその姿（後書き）

次回！主人公が何故此所に来たのか証される（かも）

fourth 小悪魔的美少女

「ハーンとお、じやああ～～」

小悪魔モード全開の琴音。琴音は一重人格で一つは天然でもう一つは小悪魔系だ。足して2で割つたら丁度なのだがな！！

「魔法少女になつてくれたらいいよ？」

小悪魔モードの琴音は時々可笑しな発言をするんだ。

「もつ一回言つてくれるか？」

「魔法少女になつてくれたらいいよ？」

一回聞いたから間違つていない。や・・・やはり俺の耳は狂つてないよつだ。少女？しょ・・・少女？しょ・・・皆に聞ひ。急に可愛い妹に『魔法少女になつてくれ』と言われた。どうするか？

「しょ・・・しょ・・・少女つて？」

「少女。」

勿論琴音も冗談半分で言つている感じではない。即ち本気なのだ。真顔で言われても（汗）

「俺男何ですけど。」

「普通に性転換すれば・・・」

性転換とかノリで言わないで欲しい…な。冗談だと信じていの…兄ちゃん、信じてるからな…。

「…………なぜに少女にこだわるんだ?」

「この王国の神が勇者やその守護者は古来から女と決めているから。男なら性転換しろって言うのが擬なんだよね。」

「そ・・・そうか。」

この時点で『少女』っていうワードは解決…出来るかボケ!
!そんな性転換する必要性を感じない。俺は女になりたくない訳で
もないが、……でもヤダよな。

「そ・・・そうか。」

勿論そんな事は言える訳がないのだが。

「何で俺はソンナモノにならないといけないんだ?ひとつと帰りたい。」

「それは無理だよ。ココに居るって事は選ばれたんだよ?もう決定なの。」

『剣士』はそれに使えるパートナーが必要で、隼くんがそれに選ばれただつて訳。」

剣士とは恐らく妹の事だろう。

「何で…魔法少女が必要なの…?」

「剣士の剣と魔法つて意外にも凄く大きく影響しているの。…さ

つき言つた様に、波動操るには魔法少女が必要…ってかあつた方が良いみたい。いた方が強い剣士になるんだって。」

即ち俺は妹のパートナーになるために呼ばれたって言う訳か。
俺は別に嫌な気がしなかつた。

…急に眠気が襲ってきた——。

それからその先—記憶に無い。

Fifth 転生のち変身

んんっ？柔らかいッ……そして良い香りと柔らかい感触が肌に当たる……しかし、体が重たくなった気がする。胸の上には何かが乗つている……そんな気がした。

……つて……！

ガバッと田覗めた時には、俺が俺じゃなかつた。

柔らかい肌、でかいを通り超した爆乳、そして、良いにおいがする。

……じやあ、ま・ま……まさか、俺の大事なア、ア……アレは……ー？

不運にも予想通り俺の大事な所は消えていた。切られた後も無く、俺は転生したのか？女…に？女、女…女になつている…！？
小さい部屋の空間の中をぐるりと見渡すと気になる物を発見する。
シンプルな部屋に似付かわしくない、超ファンシーな物体。ー…ピ
ンクの杖だ。女の子が好きそうなヤツ。気が付くとその杖を握り、
振つていた……

「みらいくるう～～チョンジ」

ウエッ……なんじゃ今のは？？？無意識に言つてる自分が怖いで、

「オイ！ その瞬間、体がふわりと浮き、全裸になりつつ光に包まれる。（お約束通り、周りから見ても多分光で見えないよ）ベットの上で、ピチピチのミニスカをはいた少女一人。：勿論俺だ。

……自分が言つてゐ事もやつてゐ事も理解出来ず、ただ立ちつくしてゐる自分。

「かんりよ～～お

……ハハ。セリフも動きも自動的にやつてくれるの？ 便利
じゃね？

「隼くん、起きた？」

MYエンジエル琴音の声だああ～～～～～！俺を癒してくれええええええええー。琴音、琴音、ことねーーツ。I LOVE琴音ーツ、俺の女神様ああ

琴音は、「スプレー？」
どつかの戦士みたいな勇者みたいな「スプレー」
ツ。可愛いこのおおお（テレテレッ）

「可愛いいー。やつぱりお兄ちゃん聴くわるい……」

女姿を褒められても全然嬉しくねえ……！…どうせなら転生前に褒められたかつたわー……。

「変身もしてんじゃんー、じゃー行く」かシ――――――」

そう言って強引に引っ張られる。幸せ……妹限定のMなのさーっ！

Fifth 転生のち変身（後書き）

途中から暴走してます（笑）

Sixth 獅子と羊

家を出ると此所は町で有り、すぐそこが市場であることが分かった。どうやらこの世界では魔法を使用出来る者も居るみたい。

「先ほどからメチャクチャ痛い視線を感じるのだが……。矢張り格^{へん}好^{しん}がミニスカでピンクだからかな?」

「君は何処から来たんだい?」

薔薇を口に銜えてる…凄く古典的なヤツが話しかけてきた。…ああそうか。今は美少女になつたらしいな。
どうりで嬉しくない視線な訳だ。だってそつだろ?男に見られて嬉しい男がいた方がキモイと思つわ…。

「ロイ、この子は記憶を無くしている。ちょっとそれとしといてあげて。」

妹が上手くごまかしてくれた。ナイツ^{琴音}ーだが…琴音よりも可愛い設定なのか?
どんなに可愛いんだよ、今の自分…。

「今のヤツはロイ・マルグス。町一番の女好きでモテ男ランク10位には入るらしいわよ。私には良い所がさっぱりわかんないケドねッ。」

でも、ロイとか言つヤツは確かに格好良かつたと思う。少なくとも転生前の俺自身よりは。(そんなモノ比べようが無いのだが…)

「あれは何だ……？」

そう言って「力過ぎる建物に向かって指を指す。

「あれは今から行く所。まー行けば分かるッ！ いくよおおー！」

…妹よ、異世界に来てからキャラ変している気がするのは俺だけか？こんなキャラじゃなかつたよねツ！？妹なら何しても可愛いがツツ！

「やつほお～、お久しぶりでえーす！」
「あッ！ マリアちゃん、久しぶり～～ッ！」

妹に向かつて「マリアちゃん」と呼ぶ声が妙に気にな。」ひちの名前だらつか?

「あッ、」いつではマコアって呼ばれてるからー。琴音でも別に良
いけど…

「マニアぢやんぢ、そのナカー?」

ここでも男が寄つてくる事寄つてくる事……。その芽が何か怖いわ
ッボケ！荒い鼻息が聞こえて来そうな勢い。
ライオン獅子に狙われた羊にで
もなつた気分。

「この子、新入りなのさ。可愛いだろお〜〜ツー・シオンって言うか

「シオンちゃんツ宣しくねツ」

俺はシオンと言つ名前の事になつた。つてかされた。男にハーレムされても嬉しくないんじやボケ！おほんツ口が悪くてすみませぬ。

「俺とチーム組まない？」「俺ツ」「僕と…」

「あツ、『』めーん。もつマリアが組んでるから無理なのツ。」

「ええー」

俺の知らない所で勝手に話が進んでいくが、全く理解出来ない…。

「じゃツハイこれ。それを胸に押し当ててツ。」

そつ言つて渡されたのは、鍵の様な物体。変なマークが刻まれている。

「『』つか…？」

その瞬間、鍵の様な物体は心臓の方に飲み込まれ、消滅していた。

「よつ『』ヤシオン、我がギルドへ…！」

Seventh ギルドへ！

「さつやら此所の無駄に度^{ヒテ}力い建物の正体は『ギルド』ならし。冒険とか、そつまつベタな感じになる気配がブンブンするわ……。

「さつきの心臓に入れた鍵は、”クオティカル”と言ひて、そこ^ヒのギルドに居る事を示すと共に……。

まあ他にも色々あるんだけど、また今度教えてあげる。」

明らか面倒になつて省略したよな？…でもあの変なマークはギルドマークなのか…

センスねえな、あのマーク作った人。

「あのマーク、実は（琴音）マコアが作ったんだよッ！凄いでしょ！？」

「へ…へえ―――ッ」

お…お前かよッ！センス無いの…（ロロコン野郎でも、さすがに）じりえられなかつたシッ（〃〃…）

「やうだなー」「マリアのセンスの良さは認めるわ。」

…オイーーの世界の奴らよッ…！今絶対否定するトドだつたからッ…。…さつやらこつちの世界はセンスやらが随分違うようだ。…そうこやー俺此所にこんなに馴染んでていーのかな？

背後からの声に振り向く。

「お・お姉サマツ、僕を置いて行くなんて酷いですツ……」

そう言つて出てきたのは小さい美少女。メイド服着用の弄りたいタイプ…。口リ野郎大好きなコシユ！ウルウルした瞳が超絶可愛いなあー。『にやん』とか言いそー…ツてか猫耳メイドさせてしまつ！（どんな感じだよ！？）

「あ～私の下僕ちゃんアイドルのアルマだよ～ん。超絶可愛いでしょ？隼…じゃなくてシオンなら勝手に使つていよいよ？」

「…下僕…。妹にはどうやら美少女な下僕が居るらしい。って言つよりも、妹は美少女好きか？いつから女王様きやらになつちやつたんだツ！？」

「お姉サマツ、僕は弟子です～。下僕じゃ…」

「」の子もチームに入れる事にしたからツ。アルマ、シオンの言つ事もしつかり聞くのよ？そして『奉公するのツ。OK？返事しない子は嫌いよ？』

「…ハイ～～～ツ。」

どんどん俺の中の妹予想図が崩れできている…。アルマは何か言つたげだが逆らいijoと無く、下を向いてしまった。

「詳しい事説明して無かつたわよね？取りあえず説明とくわ。まづ、この世界で魔法は欠かせないモノで魔法を使って依頼クリアしていくのぉ。

そして攻魔者と支魔者がいんだけビ、ペアでチームを組むのが一般的で、支魔者は（支える）だから、その名の通り攻魔者を支えるのが役田よ。

支魔法は主に『外魔法陣』を利用してゐるんだけど、その力を受け継ぎ攻魔者は攻撃するの。それを簡単に言つと力を作るのは支魔者で、それを当てるのが攻魔者っていうわけ。貴方は支魔法者で杖を使つ練習をすればいいわ。』

力説をしてゐる妹の姿は生き生きとしていた。こここの異世界で戦うのが相当楽しいのである。口調が変わつてゐるのが妙に引っかかるが…もういいや！

「じゃ、魔法レッスンは明日からねッ

いきなり後ろから喋りかけられる。すんごい美人だ。しかも巨乳…。

「あッ、マリーさん！居たんですかッ？」
「傷つくわね…ずうーっと後ろに居ましたよおー。ソレよりも、この子可愛いッ…」

そつこつて俺をムギュッとした。

「…あ…ブーッ！」（巨乳があたる…べたにも鼻血）

「私は」のガルドのリーダーのマリーも宜しくうねん。

マコさんが自己紹介をしてる中、俺は意識不明状態。
——こうして、俺の異世界一日目は幕を閉じた——

Seventh ギルドへ！（後書き）

無駄にわざわざ出てきた＆「ひひひ」として意味不な巻でシタ！

2日目、異世界のある村にて――

「ぐ・ぐうえええええ――えええ――！」

「異世界は朝から騒がしいの?」…。

鶏（？）のような異様な声が朝7時から一斉に鳴き始める。外に出ると馬のような生命体が騒がしく鳴いている。…田舎まし時計百個分ぐらい。…って、うるせー――よシ――！

この世界の住民はその声で田を覚ますから、寧ろ有難いらしい…。

朝ボウツと顔を洗いながら、自分が女だった事を鏡を見て思い出す。…可愛いなーつこの顔。転生した後顔がラブリーなのは、男でも地味に嬉しかったりする。まあ、そんな訳でギルドへ向かう――

「やつほうー」

此所は本当にほのぼのしてんなツ。まツ、この後ほのぼの一切無しがち無理状況になるなんて思つても見なかつたがなツ！（因みに後日談だ…。）遠くからロイが此方へ向かつて来ているっぽい。――コレは…口説かれる…。口説かれるぞツ？ オイ――！

「シオンちゃんツ、僕が魔法を教えてあげ…」
「結構です」

やつぱり口説きこきたか…。まーロイみたいなクソ薔薇野郎にはバツサリ言つ方が効くんだな、これが。俺は女の子にしか教えて貢わん！（君…自己中じやないですか？）

ほつとけ！女の子沢山出でるんだからラブイベント起こしててくれよ！（貴方が女の子だツて設定を崩すつもりは一切ありません…）

ケチ！いいじゃねえかよ！せめてマコーさんと位…（ないですツ…）

ただ今作者の妄想入りましたっ、ハイ、スマセマセ…。

「一応シオンちゃんの魔力調べたいし、取りあえずテストするわあ」

二つの間にやがりマコーさん登場。今日も大きいお胸で…

「こつくわよ～～

そつして連れてこられた所が…崖の上テシタ…。

『～～～ぼーにょぼーにょぼー魚の子 青い海から…』

……じゃなくて……確かに下は青い海ですけど……」の崖のした！
…じゃなくてッ……

「はいっ」

「う…コレは何ですか？」

「ほうき。」

……ま・ま・まさか、コレでと…飛べと？無理だああああ――ッ！
魔法？そんなモン知らねえよ！ほうきで飛ぶとか無望な事言つんじ
やねえ！！俺は後ろを向いて走った。ガチ全速力で。
しかし――魔法の力にただの人間の力なんかが勝てる訳が無かつた
ようだ。

……

「逃げるのが悪いよねッ」

「ちゃんと言つてくれたら止めたのにーー。」

後ろで何か言つてるマリーさんと妹、…アルマちゃん（は無言で。）
逃げられない様にほつきに跨り鎖で繫がれた俺の両手。可愛い天使
に見えた妹も今は悪魔にしか見えません（泣）。神様ッ俺の大事な
琴音を返り手ください！！それに純粹に冒險的ストーリーにしてく
れれば良かったのに…どつから俺が崖から飛び降りるドキュメンタ
リーになつたんだつ…

「あーー、カウントこきまーす。10・3・2…」

何！？10から3に飛ぶのかよ！心の準備が…それに、言い方軽いなオイツ！！

「1…いけえええ！」

後ろから蹴られ（まさかの荒技に驚くわ…）そのまま綺麗に落下

――――――

E・i せんた 魔法を学ぼうッジ（後書き）

ここで主人公が死んでまさかの小説終了か！？
どうなるのかッ！？

それよりも、いつからギャグ思考になつたのだ？私！

nine 世界の狭間、白い世界。

『シオン
隼』

気が付くと、見覚えのある部屋に驚愕。何処かで来たような真っ白な部屋は、異世界に飛ぶ前に見たモノと同じ気がした。そしてふと、女が前に立っている事に気が付いた。

『田は覚めましたか?』

「あ…ああ」

目の前には偉い美人様が居る。今まで多分一番かも…。そう言えばさ…この世界、美女ばかり出るのはよろしい（何様！？）と思うが、ラブな雰囲気にはならねえな…くそ作者めッ！！（クソ主人公に言われたくねえな…）

今回もスミマセン。

『貴方に伝えるべき事が有ります』

「な…何だ…？」

myワールド（つまり俺の妄想内）に入り込んでたし…。

『貴方は…死にました。』

「…は？」

『つまり、ゲームオーバーです。』

し…死？死んだ？シンダ…。俺、崖で死んだんだ…。

『ただ』

「ただ？」

「異世界は壊滅の危機に陥っているのを」「存じですか？」

「壊滅？」

「はい。異世界に災いが起き、壊滅してしまったかもしぬれないので。

「……」

あの平和な国が、壊滅してしまつの…？そんなの…いやだ…それより、内容にまだ深入りしてないのに
終わっちゃう感じで大丈夫なのか？まだ本編入つてないぞ…？（マジで）

「…………しあうがないですね。貴方にチャンスを『えましあう。いや、
異世界を救つて下さい』

白い世界は渦を巻いて黒くなつていつた――

nine　世界の狭間、白い世界。（後書き）

つまらん小説でスミマセン（泣）
直して欲しい所、ずばずば教えてくれる方募集！
毒づく感じでOKです！寧ろ有りがたい！

一章完結、お礼

「ここまで呼んでくれた心の広い、もしくは暇野郎様。どうも有り難いわ~！」

「ここまで一章完結です。魔法系全く出ていませんが、これから出ます…（Maybe）

ハーレムって程ハーレムでも無いし、面白くないし……読み返したら自分で「つまんねえ～」とか言いながら読みました（苦笑）そんな事言いつつ2章やります（…なんでだらづ～）

理由は簡単です。書きたいから。そり、書きたいから……まーいいや。

因みに2章はバトル系にしようかな～とか軽い気持ちで考えています。

ゴルい感じで読んで頂けたら有りがたいです…。

―― もう一度おさらい――

- ・ 隼主人公。中身男の美少女
（ショーン・マリア）
- ・ 琴音可愛い隼人妹
- ・ ロイ　　ただの女好き
- ・ アルマ　　アリアの弟子。ロリ
- ・ マリー　　美女。ギルドリーダー。熟女設定で一応、ハイ。

でわでわあーー。2章の方も宜しくお願ひしますーーー

？（？）まさかの俺最強

『「集シオン…田を覚まして…！」』

遠くの方で俺を呼ぶ声が聞こえて木霊する。意識は朦朧とした中でも一応有るが、体は金縛りに遭った様に動かない。不思議と遠かつたその声は段々近づいてくる気がする…

「隼ツ…！」

俺は泣きじゅぐる声こなつと田を覚まして、すぐ側で既が泣いている事に気が付いた。

「し…シオーネン…！」

皆が俺に抱きつぶ。皆本気で心配してくれたようだ。俺はソレが凄く嬉しかった。女子は良しとして…ロペ、お前は離れてくれっ！キモイから、マジ。

「心配せないでよッ！私の責任になるかと思つて心配してたんだから！」

ま・マリーさんの心配所、そこですか。しかし女子とは何故こんなに甘い臭いなのだろう。それぞれ特有の甘いにおいが俺の鼻の中に刻まれる。

「じゃー魔法レッスンいくよ～？」

「休ませてくれねえのかよ…？」

俺死にかけたんだぜ？異世界じゃなかつたら死んでますよ？俺。異世界は結構なんでも有りなんですね～。

「じゃあ、簡単なヤツからね。」

マリーさんは基本的に思いついたり上手いな。俺は上めぬ」と
が出来そうに無い。

.....

「火を造作して、それで攻撃する一番簡単な魔法からいこうかしら？因みに魔法はランク別にされていて、この魔法はFの最低ランク。一応FECBASの順に形成されていて、私やマリアは使えるけどこのギルドでもランク魔法を使えるのはいくわざかなの。……そーね。火を作りるイメージで念じなさい！」

火を作る…か。俺は自分の思った通りに火を念じる。すると、俺の手の平から青白い光が形成される。

」…！？

周りは騒がしかつたのに、それと共に静まりかえった。ギルド内が沈黙になるのは本当に珍しいのだ。そして、皆俺を見ている気がする。驚く様にマリーさんも俺を見ていた。

青白い光は瞬く間に大きくなり、やがては渦を巻く。…のだが、すぐには消えてしまった。

「……貴方には才能が有りそうね……」

「まつჯッヒマコー やんば 言ひた。

「お前……」

「まじかよ……」

まだキヤラとしては出でていない脇役共がヒソヒソ話している。今の
…そんなに凄えのか？

「集シオン よく聞きなさい。今の…光はランクUの最強魔法。『正式名
S a t a n S e a l』と言つて皆が知つている魔法なの…。」

「アリなのか…。」

そんな事言われても…何ソレ。俺最強って事？

? (?) 悪魔と魔法、

――この世界、地球からみて異世界は神が作り出した物：では無く、天国から追放された悪魔が作りだしました。

悪魔は自分の思い通りになる所謂^{いわゆる}思い通りの世界を作ろうとしました。そして悪魔は始めに星を作り、その後に自分の奴隸を作り町を作り、地を作り海を作り、ついには自分の思い通りになる原子体を集めた生物を作りました。

その生命体は悪魔に誘導され、人形の様な物だったのですが、悪魔は動かすのが面倒になり、それで生命体に心を与えました。

始めは生命体も一生懸命働いたのにも関わらず悪魔は次第に自己中心的になり、生命体の中でも不満を持つ者が出てきたのです。

一方その頃、悪魔は第二の星を作りました。そこにも生命体を生ませました。因みにそこが今の地球です。悪魔は生命体達が不満を持っている事も知らなかつたのです。

そして、生命体は魔法を生み出しました。いえ、悪魔を見て独学で覚えたと言つて良いでしょう。悪魔の持つていた書を勝手に持ち出して夜な夜な勉強に明け暮れました。

そして真夜中。生命体は悪魔の所に一斉に向かいに行きました。しかし何も知らない悪魔はぐっすり眠っています。しかし悪魔は目を覚ましてしまい、次々と悪魔の攻撃により生命体はやられてします。

そのまま激戦になります。千…一万ほどの生命体を相手に悪魔は戦います。

しかし、悪魔には魔力が無いに等しい状況でした。自分の魔力を異世界作りの為に削つて作っていたのです。悪魔は意識朦朧とした中、必死に戦いました。

生命体の数が百に近くなりました。生命体はどんどん消えて泡となります。生命体は非常に脆く作られていた為、悪魔の攻撃にどんどんやられます。

そこで、辺りが光りました。生命体の一揆を見て心が奪われた神は、一時的に生命体に力を授けたのです。

生命体全てが一斉に魔法を使い、中心部に青白い渦が出来たのです。

大きくなつたその渦に吸い込まれ、悪魔は封印されてしまいました。

生命体はその後自分達で異世界を復興させました。その魔法の事は祖先から、長く受け継がれているのです。

? (?) 悪魔と魔法、(後書き)

昔話 (笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2507x/>

義妹は姫君剣者ッ！

2011年11月17日22時49分発行